

大学生の親に対する態度・行動とアイデンティティ、 対人態度の関連性

山本彩留子・岡本祐子

The relationship among behavior for their parents, identity and interpersonal attitude
in university students

Satoko Yamamoto and Yuko Okamoto

本研究では親子関係の多様化を考える上での一つの手がかりを見出すため、大学生の親に対する態度・行動とアイデンティティ、対人態度の関連性を分析し、その性差を検討することを目的とした。対象者は大学生 180 名であり、使用尺度は小高(1999)の親—青年関係尺度、高井(1999)の対人関係性尺度、谷(2001)の多次元自我同一性尺度(MEIS)を用いた。尺度の因子間での関連を男女別に検討した結果、父親—男子関係と「対自的同一性」、母親—女子関係は「閉鎖性・防衛性」に、父親—女子関係は「閉鎖性・防衛性」に、影響していることが明らかになった。また、MEIS と対人関係性尺度の下位項目間には強い相関があり、影響していることも示された。これらの結果から、アイデンティティは親子関係よりもむしろ対人関係に影響を受けることが明らかになった。また、男子は父親に対する依存的同一性、女子は母親との強い結びつきが推測される結果が得られた。

キーワード：青年期、親子関係、アイデンティティ、対人態度

問題と目的

青年期における親子関係の変化 青年期は心理的離乳の時期であり、また親子関係が大きく変化する時期とされている(山岸, 2000)。心理的離乳の過程には中高生にあたる青年期前期・中期に、理想と異なる親を批判し葛藤が生じ、親から分離しようとする気持ちが高まる。しかし大学生にあたる青年期後期になると親を客観視できるようになり、親子関係を再構成し対等に関わることができるようになる(落合・佐藤, 1996)。この関係の捉え直しによって、子は親を一人の人間として捉えることが可能となる。

また親子関係の変化は、日常生活における子の親に対する態度や行動の中にも表れる。小高(1998)は大学生を対象に、日頃の親に対する態度に関する項目を収集し質問紙を作成した。その結果から心理的離乳の過程を捉える有用な枠組みを提案している。この先行研究では、親子の関係だ

けでなく青年の心理的な発達過程を知る上で、一つの手がかりとなる5因子が抽出された。それらは①親からのポジティブな影響、②親との対立、③親への服従、④親との情愛的絆、⑤1人の人間として親の認知、の5因子である。

親子関係変化の男女差 青年期における親との関係は性別によって違いがあることが示唆されている。心理的離乳における青年期の男女の比較においては、西平・久世(1988)の青年期の心理的離乳プロセスにおいて男女差が見られた。その違いは男性より女性の方が「親への甘え」が強く、女性よりも男性の方が「親から仲間への離脱」が強い結果となった。加えて、特に青年期の女性と母親との関係が継続して良好であるという指摘もされている(山岸, 2000)。家族機能における青年期の男女差について、白石・岡本(2005)によると、凝集性尺度、適応性尺度ともに男性の方が有意に低く、女子学生がより自分の家族の機能を高く捉えていることが示されている。また、岡本・上地(1999)は中学生・高校生を対象に親への認知について調査を行ったところ、親イメージに関して、父親に対する脱依存で女性は男性と比較して有意に高く、かつ低年齢ほど差が大きくなっていることを示した。このことから、女性において依存対象としての父親イメージは青年期以前から希薄であることが推察されている。

青年期の親子関係と自己形成の関連 青年の自己を形成する様々な要因が、親子関係と密接に関わっていることは多くの先行研究から唱えられている。その中でも特に取り上げられることが多いのは、青年期の発達課題であるアイデンティティとの関連である。アイデンティティは、自分は他者と異なる個別の、過去・現在・未来に渡って連続性のある存在であり、かつ社会への帰属感があると感じる概念である。またアイデンティティ拡散はアイデンティティがうまく確立できていない状態を指し、発達上の危機として捉えられている。金子(1989)は、親の心理的距離とアイデンティティ拡散感との関連の研究を行った。その結果、両親特に母親の心理的距離が遠いほど、アイデンティティ拡散感を強く持つことが明らかとなった。高橋(2001)は、アイデンティティ発達と親に対する親和性との関連について研究を行った。青年期前期にある青年についてアイデンティティ発達の程度が高い時、親に対する親和性も高く、同性の親に同一視欲求を持つことを明らかにした。これらの結果から、アイデンティティ確立には親子関係が影響を及ぼしていることが考えられる。

親子関係とアイデンティティ、対人態度の関連 このように青年の親子関係を扱った研究は、数多く行われてきた。それらの研究結果からわかるように、青年期後期の親子関係は青年の自己を形成する概念と関連し、また継続して親子関係は重要な役割を担っていることが明らかにされている。ただ、青年期における親との関係は自己形成だけではなく、対人関係に対する態度とも関連があることが考えられる。これは生まれてから最初に関わる重要な他者は親であり、その親子関係はその後の親以外の対人関係とも何らかの関連があることが考えられるためである。そもそも一人の人間として自己を確立させる時期にある青年にとって、他者との関係は非常に重要である。

このように青年期の親子関係や友人関係を検討した研究は多くなされているが、友人だけに限らず他者関係に焦点を当て、親子関係とアイデンティティ、対人態度という3点を同時に検討した研究はほとんどなされていない。そして親子関係が多様化する現在において、この3点の関連の仕方も従来の研究結果から変化していることも考えられる。従来の先行研究では、青年期中期において

同性の親に対する反抗が高まるとされていたが、岡本・上地（1999）によれば、女性は青年期中期に母親への理解が強まり、再び母親を理想化することが推測されている。

目的 本研究では、大学生の親に対する態度・行動とアイデンティティ、対人態度の関連性を分析し、その性差を検討することを目的とする。

方法

調査対象 大学生 1～4 年生 189 名であり、無効回答や欠損回答を除いた 180 名の回答を用いた（有効回答率 95.2%）。男性 89 名（ $M20.3$ 歳， $SD1.4$ ），女性 91 名（ $M20.4$ 歳， $SD1.3$ ）であった。自宅通学の学生は 55 名、自宅外から通学している学生は 125 名であった。回答の得られた父親についての質問項目 男性 86 名と女性 87 名、母親について 男性 88 名と女性 91 名を分析の対象とした。調査時期は 2007 年 10 月 10 日から 30 日であった。

使用尺度 フェイスシート 性別、年齢、両親の有無、親と同居しているか一人暮らしかを訊ねた居住形態の記入を求めた：①親—青年関係尺度：小高（1999）の 25 項目を用いた。回答は「全く当てはまらない～非常によく当てはまる」（1～5 点）の 5 件法で求めた。また、一つの項目について母親と父親それぞれの内容を訊ねた。②対人関係性尺度：高井（1999）の 28 項目を用いた。回答は「全く当てはまらない～よく当てはまる」（1～5 点）の 5 件法で求めた。③多次元自我同一性尺度（以下、MEIS と略記）：谷（2001）の 20 項目を用いた。回答は「全くあてはまらない～非常にあてはまる」（1～7 点）の 7 件法で求めた。

手続き フェイスシートと 3 種類の尺度を冊子とし、個別配布個別回収形式の質問紙調査で実施した。一部の対象者は後日提出する形を取った。回答所要時間は 10 分から 30 分であった。

結果と考察

親—青年関係尺度の検討

25 項目について父母別に因子分析（主因子法，Varimax 回転）を行った（Table 1, Table 2）。負荷量が 0.3 以上の因子を採用すると、父親—青年関係と母親—青年関係のどちらも 7 つの因子が抽出された。7 因子のうち 2 因子は項目が 1 つのみであったため、この 2 項目は分析から除外した。除外した 2 項目以外の 23 項目による 5 因子の構造は小高（1999）のものと完全に一致した。また「母親と私の人生は違う」という項目の因子負荷量は.289 で、基準より低い固有値であるが、先行研究の母親—青年関係尺度との対応から採用した。

父親—青年関係尺度の 5 因子について先行研究と同様、順に「父親との情愛的絆」（以下「父子絆」）、「父親からのポジティブな影響」（「父子ポジティブ」）、「父親との対立」（「父子対立」）、「父親への服従」（「父子服従」）、「一人の人間として父親を認知する」（「父子認知」）とした。また、母親—青年関係尺度の 5 因子について先行研究と同様、順に「母親からのポジティブな影響」（以下「母子ポジティブ」）、「母親との対立」（「母子対立」）、「母親との情愛的絆」（「母子絆」）、「母親への服従」（「母子服従」）、「一人の人間として母親を認知する」（「母子認知」）とした。

Cronbach の α 信頼性係数は、「父子絆」 $\alpha = .89$, 「父子ポジティブ」 $\alpha = .80$, 「父子対立」 $\alpha = .81$, 「父子服従」 $\alpha = .72$, 「父子認知」 $\alpha = .64$, 「母子ポジティブ」 $\alpha = .79$, 「母子対立」 $\alpha = .83$, 「母子絆」が $\alpha = .81$, 「母子服従」 $\alpha = .69$, 「母子認知」 $\alpha = .63$ となった。

Table 1 父親—青年関係の因子分析結果 (主因子法, Varimax 回転)

項目	因子						
	1	2	3	4	5	6	7
第1因子: 父親との情愛的絆							
7 父親に対してこれからは、親孝行したい。	0.87	0.16	0.00	0.05	0.03	-0.01	-0.17
10 自分が今安心して生活できるのは、父親の存在があるからだ。	0.79	0.11	-0.02	0.06	-0.02	0.27	0.17
17 最近、父親のありがたみを感じることもある。	0.74	0.23	-0.12	0.08	0.05	0.03	-0.04
13 父親に対していたわってあげたい。	0.73	0.16	-0.03	0.12	0.16	-0.05	-0.12
21 父親に対して感謝の気持ちを持っている。	0.71	0.35	-0.07	0.00	-0.02	0.00	0.00
第2因子: 父親からのポジティブな影響							
20 父親によって人生観が深められた。	0.12	0.72	-0.10	0.02	0.06	0.12	-0.04
4 父親によって自分の視野が広がった。	0.32	0.63	-0.06	0.17	0.07	0.18	-0.20
15 父親は生き方の1つのモデルを私に示してくれたと思う。	0.29	0.56	-0.12	0.03	0.05	0.05	0.09
5 自分の価値観には、父親の価値観が影響している。	0.37	0.54	-0.07	0.11	0.00	-0.23	-0.23
9 私が決める際、父親の意見は十分参考になると思う。	0.43	0.51	-0.12	0.16	-0.06	-0.05	0.12
第3因子: 父親との対立							
19 私と父親の言うことはいつも対立する。	-0.07	-0.06	0.78	0.00	0.06	-0.02	0.03
6 父親を理解しようと思うのだがつい反抗しけんかになることが多い。	0.04	-0.04	0.75	-0.05	-0.01	0.06	-0.16
22 自分の進路、生き方などのことで父親と対立することがある。	0.03	-0.02	0.73	0.02	-0.06	-0.06	0.05
2 私の意見や考え方が父親に伝わらず、イライラすることが多い。	-0.26	-0.21	0.66	0.05	0.11	0.01	0.09
12 父親の価値観に疑問を持っている。	-0.40	-0.29	0.43	0.18	0.18	0.00	0.33
第4因子: 父親への服従							
8 父親に逆らえないで、言うとおりになってしまうやすい。	0.02	0.04	0.02	0.78	-0.11	-0.12	0.10
16 父親のいうことにはいつも従っている。	0.09	0.11	-0.04	0.66	0.10	0.18	-0.08
25 私は父親の言う通りに生きている。	0.08	0.02	0.11	0.64	0.02	0.22	-0.23
3 自分の意見と父親の意見が違う時、父親の意見に左右されやすい。	0.07	0.41	-0.01	0.46	-0.19	-0.19	0.12
第5因子: 一人の人間として父親を認知する							
14 やっぱり父親も一人の人間だと思うようになった。	0.13	0.16	0.05	0.06	0.71	-0.16	0.15
24 父親のことを一人の人間として客観的に見ている。	-0.04	-0.05	0.05	0.08	0.69	-0.01	-0.11
1 父親も一人の人間だと思って接している。	0.11	0.05	-0.03	-0.04	0.61	0.07	0.07
11 自分の生き方は父親の生き方とは独自のものだ。	-0.03	-0.05	0.02	-0.22	0.31	-0.02	0.05
23 父親の期待にそった生き方をしている。	0.15	0.16	-0.01	0.36	-0.14	0.50	0.00
18 父親と私の人生は違う。	-0.07	-0.03	0.00	-0.13	0.23	0.00	0.30
寄与率	22.59	9.45	7.72	5.94	3.97	2.18	1.91

Table 2 母親—青年関係の因子分析結果 (主因子法, Varimax 回転)

項目	因子						
	1	2	3	4	5	6	7
第1因子: 母親からのポジティブな影響							
20 母親によって人生観が深められた。	0.76	-0.25	0.13	-0.03	0.05	0.01	-0.03
4 母親によって自分の視野が広がった。	0.67	-0.18	0.14	0.22	-0.01	-0.13	0.02
9 私が何かを決める際、母親の意見は十分参考になると思う。	0.60	-0.07	0.27	0.11	-0.03	0.13	0.15
5 自分の価値観には、母親の価値観が影響している。	0.53	-0.12	0.12	0.12	-0.05	0.00	0.19
15 母親は生き方の1つのモデルを私に示してくれたと思う。	0.49	-0.14	0.15	0.02	0.12	0.06	0.01
第2因子: 母親との対立							
2 私の意見や考え方が母親に伝わらず、イライラすることが多い。	-0.19	0.78	-0.10	0.00	0.01	0.09	0.06
6 母親を理解しようと思うのだがつい反抗しけんかになることが多い。	-0.04	0.73	-0.01	-0.04	-0.08	-0.21	0.04
22 自分の進路、生き方などのことで母親と対立することがある。	-0.18	0.71	-0.09	0.03	0.04	0.13	-0.14
19 私と母親の言うことはいつも対立する。	-0.20	0.65	-0.19	0.01	0.04	-0.14	-0.09
12 母親の価値観に疑問を持っている。	-0.33	0.52	-0.21	0.08	0.19	0.25	0.10
第3因子: 母親との情愛的絆							
7 母親に対してこれからは、親孝行したい。	0.16	-0.10	0.85	0.06	0.06	-0.07	0.06
17 最近、母親のありがたみを感じることもある。	0.20	-0.30	0.68	0.09	0.01	0.01	-0.01
13 母親に対していたわってあげたい。	0.20	-0.02	0.66	0.02	0.18	0.03	0.20
21 母親に対して感謝の気持ちを持っている。	0.36	-0.19	0.53	-0.02	0.12	0.18	-0.17
第4因子: 母親への服従							
16 母親のいうことにはいつも従っている。	0.12	-0.01	0.02	0.74	0.07	0.09	0.02
25 私は母親の言う通りに生きている。	0.08	0.07	0.04	0.68	-0.04	-0.06	0.07
8 母親に逆らえないで、言うとおりになってしまうやすい。	0.06	-0.06	-0.06	0.65	0.01	0.10	0.07
23 母親の期待にそった生き方をしている。	0.01	0.03	0.14	0.37	-0.16	-0.11	0.03
第5因子: 一人の人間として母親を認知する							
24 母親のことを一人の人間として客観的に見ている。	0.08	0.09	0.02	0.11	0.74	-0.25	-0.21
14 やっぱり母親も一人の人間だと思うようになった。	0.18	0.00	0.23	-0.06	0.64	0.03	0.25
1 母親も一人の人間だと思って接している。	0.22	-0.06	0.13	0.10	0.50	0.09	0.04
11 自分の生き方は母親の生き方とは独自のものだ。	-0.10	-0.01	0.02	-0.12	0.38	-0.01	-0.12
18 母親と私の人生は違う。	-0.11	0.05	-0.03	-0.07	0.29	0.14	0.00
10 自分が今安心して生活できるのは、母親の存在があるからだ。	0.37	-0.08	0.48	0.14	0.03	0.52	-0.09
3 自分の意見と母親の意見が違う時、母親の意見に左右されやすい。	0.20	-0.05	0.10	0.28	-0.11	-0.03	0.55
寄与率	10.69	10.56	9.91	7.24	6.39	2.51	2.49

多次元自我同一性尺度の検討

MEIS 20 項目について因子分析 (主因子法, Promax 回転) を行った (Table 3)。その結果負荷量が 0.3 以上の因子を採用すると、4 つの因子が抽出された。因子構造は谷 (2001) と完全に一致したため、順に「対自的同一性」、「自己斉一性・連続性」、「心理社会的同一性」、「対他的同一性」とした。Cronbach の α 信頼性係数は、「対自的同一性」 $\alpha = .88$ 、「自己斉一性・連続性」 $\alpha = .83$ 、「心理社会的同一性」 $\alpha = .32$ 、「対他的同一性」 $\alpha = .82$ であった。「心理社会的同一性」の α 係数が低い結果だが、これは社会に出ていない大学生を対象としたためであると考えられる。また、MEIS 全体を示す指標として、全ての下位尺度得点の合計を示す「総得点」も、分析に加えた。

Table 3 多次元自我同一性の因子分析結果(主因子法, Promax回転)

項目	因子			
	1	2	3	4
第1因子:対自的同一性				
6 自分がどうなりたいのかははっきりしている。	0.94	-0.09	0.02	-0.07
2 自分が望んでいることがはっきりしている。	0.85	-0.14	0.00	0.00
14 自分が何をしたいのかよくわからないと感じるときがある。	0.72	0.22	-0.24	0.09
10 自分のすべきことははっきりしている。	0.71	-0.04	0.16	-0.14
18 自分が何を望んでいるのかわからなくなることがある。	0.63	0.22	0.04	0.08
第2因子:自己斉一性・連続性				
9 いつのまにか自分が自分でなくなってしまったような気がする。	0.03	0.82	0.04	-0.06
5 過去に自分自身を置き去りにしてきたような気がする。	0.04	0.79	-0.03	0.03
13 今のままでは次第に自分を失っていってしまうような気がする。	0.05	0.72	0.08	-0.05
1 過去において自分をなくしてしまったように感じる。	-0.12	0.72	-0.05	-0.01
17 「自分がない」と感じることもある。	0.26	0.33	0.17	0.04
第3因子:心理社会的同一性				
12 現実の社会の中で自分の可能性を十分に実現できると思う。	0.07	-0.04	0.86	-0.06
8 現実の社会の中で、自分らしい生活が送れる自信がある。	0.12	-0.17	0.81	0.09
4 現実の社会の中で、自分らしい生き方ができると思う。	-0.04	0.05	-0.78	-0.09
20 自分の本当の能力を生かせる場所が社会にはないような気がする。	-0.10	0.17	0.65	-0.14
16 自分らしく生きてゆくことは、現実の社会の中では難しいだろうと思う。	-0.16	0.29	0.56	0.04
第4因子:対他的同一性				
3 自分のまわりの人々は、本当の私をわかっていないと思う。	-0.02	-0.05	-0.08	0.89
11 人に見られている自分の本当の自分は一致しないと感じる。	-0.10	-0.09	-0.05	0.88
7 自分は周囲の人々により理解されていると感じる。	0.22	-0.11	0.09	0.55
19 人前での自分は、本当の自分ではないような気がする。	-0.05	0.19	0.22	0.52
15 本当の自分は人には理解されないだろう。	-0.03	0.26	0.00	0.48
寄与率	36.37	10.40	7.17	4.71

対人関係性尺度の検討

対人関係性尺度 28 項目について因子分析 (主因子法, Varimax 回転)を行った。その結果負荷量が 0.3 以上の因子を採用すると、5 つの因子が抽出された。因子構造は高井 (1999) と異なり、信頼性係数も低い結果であった。そのため因子分析の結果を用いず先行研究に従って、「閉鎖性・防衛性」、「ありのままの自己」、「他者依拠」、「他者受容」、「自己優先」とした (Table 4)。Cronbach の α 信頼性係数は、「閉鎖性・防衛性」 $\alpha = .83$ 、「ありのままの自己」 $\alpha = .73$ 、「他者依拠」 $\alpha = .73$ 、「他者受容」 $\alpha = .66$ 、「自己優先」 $\alpha = .55$ であった。

各尺度における男女差の検討

3 つの尺度からの 15 個の因子得点において男女差を検討するため、性別を要因とした t 検定を行った (Table 5)。その結果、親-青年尺度の「母子ポジティブ」因子に、男性と女性との間に有意傾向が見られた。対人関係性尺度では、「自己優先」因子に男性が女性よりも高い得点を示したが、「他者受容」因子では女性が男性よりも高い得点を示した。

Table 4 対人関係性尺度の因子構造

第1因子: 閉鎖性・防衛性	
13	私は人に対して心を閉ざしているような気がする。
4	私は人との付き合いに臆病な方である。
7	私は人に対して好意的になれない。
10	私は人を信用できない。
21	傷つきたくないの、人にはありのままの自分を出せない。
1	私は人との関係がこわれてしまうことがこわいので、ありのままの自分を出せない。
第2因子: ありのままの自己	
9	私は少しぐらい傷つくことがあっても、自分のありのままの姿で人と接している。
27	私は人とは少し傷ついても本音で言い合っている。
6	私は人からどう思われようとありのままの自分を生きている。
19	私は自分の弱さや欠点を余り隠そうとはしない。
第3因子: 他者依拠	
17	私は人に自分がどう思われるかということがとても気になる。
28	私は何かにつけ、すぐに人と比較してしまう。
11	私は他人より劣っているか、すぐれているかを気にしている。
16	私は人がどうしてそうしたのかを知ることに関心がある。
*23	私は自分に対する人の評価は余り気にしない。
25	私は人に対して、自分のイメージを悪くしないかと恐れている。
第4因子: 他者受容	
24	私はちょっとしたことでも、人に世話をしてあげることが楽しい。
26	私は人の良いところ、すぐれているところを進んでほめる。
3	私は人のことでも、自分のことのように感じることが多い。
8	私はいつも相手を理解しようと心がけている。
12	私は人のあやまちを気持ちよく許せる方である。
15	私は相手の良いところも悪いところも、ありのままに受け入れられる。
20	私は自分と合わない相手でも、その人のすぐれている点は認めることができる。
第5因子: 自己優先	
18	私は相手の言うことに耳を傾けるよりも、自己主張を優先してしまう。
22	私は相手を理解しようとするよりも、自分のことを分かってほしいという気持ちの方が強い。
*5	私は自分と異なる意見にも積極的に耳を傾けようとする。
2	私は人を表面的に判断してしまいやすい。

注) *がついている項目は逆転項目を示す。

Table 5 性別による各尺度の差

	男(N=89)		t値	df	有意水準
	M(SD)	M(SD)			
母子ポジ	3.57(0.82)	3.77(0.70)	-1.75	177	$p < .10$
自己優先	2.83(0.65)	2.65(0.62)	1.92	178	$p < .10$
他者受容	3.41(0.62)	3.63(0.48)	-2.60	178	$p < .01$

注1) 「母子ポジ」とは「母子ポジティブ」を示す。

注2) 「母子ポジティブ」の男性のみ、N=88。

親子関係とアイデンティティの相関

男性女性について、親との関係とアイデンティティの関連を検討するために下位尺度ごとの平均点を算出し、2変量の相関分析を行った (Table 6, Table 7)。まず男性の親-青年関係尺度と MEIS の結果を示したところ、「母子対立」と「心理社会的同一性」、「父子ポジティブ」と「対自的同一性」

に負の相関が見られた ($p < .05$)。次に女性の親—青年関係尺度と MEIS の結果を示したところ、「母子絆」と「総得点」、「母子絆」と「自己斉一性・連続性」に負の相関が見られた ($p < .05$)。

これらの結果を、まず男性から検討する。「母子対立」と「心理社会的同一性」の負の相関は、金子 (1989)にもあるように、親と対立する事は親の価値観を鵜呑みにするのではなく、自分の新たな価値観を構築しようとする表れである。対立はするものの学生であるため社会に対する経験をまだ持っておらず、社会との結びつきに適応できるという確信がもてない状態にあることが考えられる。

「父子ポジティブ」と「対自的同一性」の負の相関は、自我発達の高い者は同性の親への親和性が高いという高橋 (2001)に反するものであった。本研究の結果から、同性である父親を理想とすることでその理想と今の自分との隔たりを実感し、自己意識を確立しがたい状態にあることが考えられる。この尊敬している者に対する同一視を森下 (1977) は依存的同一視として定義づけ、理想を設定しやすく道標の役割を果たす一方で、葛藤や退行的な引き戻しを生じさせることも推測される。

次に女性の結果について検討する。母親への感謝の態度を示した「母子絆」と「総得点」との間に負の相関があり、高橋 (2001)に反する結果となった。これは親—青年尺度で示す「絆」は感謝や愛情を示すだけでなく、甘えや親和傾向も表していると推測される。実際、小高 (1998) の「親との情愛的絆の因子」は小沢・湯沢 (1989)の「親への甘えの因子」と類似していることが示唆されている。母親との心理的距離が近く、親和志向が高い密着した母子関係が、アイデンティティ確立の妨げになっていることが考えられる。また金子 (1989) や山岸 (2000) にもあるように、女性にとって特に母親との結びつきが強いことを表す結果となった。

Table 6 男性の親—青年尺度とMEIS, 対人関係性尺度の相関

	母子絆	母子対立	母子ポジ	母子認知	母子服従	父子絆	父子対立	父子ポジ	父子認知	父子服従
MEIS										
総得点	0.01	-0.05	-0.02	-0.01	-0.03	0.06	0.07	-0.17	-0.04	-0.10
対自的同一性	-0.09	0.01	-0.07	0.00	-0.04	-0.03	0.19	-0.25*	-0.04	-0.10
自己斉一性・連続性	-0.02	0.05	-0.09	-0.05	-0.04	0.02	0.04	-0.17	-0.06	-0.06
心理社会的同一性	-0.02	-0.22*	0.04	0.02	-0.03	0.03	-0.01	-0.09	-0.03	-0.12
対他的同一性	0.20	-0.10	0.12	0.01	0.01	0.19	-0.05	0.01	0.01	-0.03
対人関係性尺度										
閉鎖性・防衛性	-0.15	0.08	-0.13	0.00	0.08	-0.13	-0.11	0.00	0.01	0.20
ありのままの自己	-0.05	0.03	0.07	0.07	-0.11	0.08	0.08	-0.03	0.07	-0.17
他者依拠	-0.04	-0.03	-0.14	0.08	-0.14	-0.07	-0.08	-0.09	0.11	-0.13
他者受容	-0.14	0.07	-0.08	-0.05	0.03	0.00	0.05	-0.11	0.02	0.01
自己優先	0.11	-0.02	0.07	0.03	-0.10	0.03	-0.07	0.07	0.06	-0.01

* $p < .05$

注3) 「父子ポジ」は「父子ポジティブ」を示す。

Table 7 女性の親—青年尺度とMEIS, 対人関係性尺度の相関

	母子絆	母子対立	母子ポジ	母子認知	母子服従	父子絆	父子対立	父子ポジ	父子認知	父子服従
MEIS										
総得点	-0.25*	0.18	-0.15	-0.13	-0.09	-0.10	-0.15	-0.02	-0.14	-0.08
対自的同一性	-0.13	0.14	-0.05	-0.02	-0.17	-0.07	-0.02	0.01	-0.06	-0.10
自己斉一性・連続性	-0.24*	0.12	-0.14	-0.09	0.01	-0.06	-0.18	0.01	-0.08	-0.12
心理社会的同一性	-0.12	0.13	-0.03	-0.08	0.01	-0.03	-0.13	0.04	-0.10	0.08
対他的同一性	-0.19	0.12	-0.19	-0.19	-0.06	-0.13	-0.11	-0.11	-0.16	-0.04
対人関係性尺度										
閉鎖性・防衛性	0.24*	-0.19	0.26*	0.27**	0.03	0.20	0.01	0.27*	0.21	0.03
ありのままの自己	-0.06	0.09	-0.18	-0.01	0.01	-0.04	-0.06	-0.11	0.03	-0.01
他者依拠	0.01	-0.19	0.05	-0.07	-0.13	0.07	-0.11	0.06	-0.10	-0.05
他者受容	0.07	-0.07	-0.02	-0.07	-0.10	0.04	0.15	-0.03	-0.01	0.02
自己優先	-0.05	-0.09	-0.03	0.10	0.07	0.14	-0.27*	0.11	0.07	0.12

** $p < .01$ *, $p < .05$

親子関係と対人態度の相関

性別ごとに親子関係と対人関係の関連を検討するため下位尺度ごとの平均点を算出し、2変量の相関分析を行った (Table 6, Table 7)。男性の親—青年関係尺度と対人関係性尺度に相関は見られなかった。女性の親—青年関係尺度と対人関係性尺度について、「閉鎖性・防衛性」と「母子絆」「母子ポジティブ」「母子認知」「父子ポジティブ」それぞれに正の相関、「父子対立」と「自己優先」に負の相関が見られた ($p < .05$)。

本研究での男性の結果では親子関係と対人態度の間には関連が見られず、先行研究と反するものとなった。女性の結果からは、親との関係が良好であることと、対人関係が閉鎖的で防衛的であることの関連が明らかになった。この結果は矛盾しているようだが、親との親和志向が甘えや依存を含んでいると考えれば合致する。つまり両親への甘えや依存が強いと、他者からの傷つきへの耐性が弱く心を開くことに不安があると推察される。

親子関係とアイデンティティ, 対人態度の全体的な関連性

性別ごとの3尺度の関連性を検討するため重回帰分析を行った。父母ごとの親—青年関係尺度の5因子を説明変数、MEISの下位尺度、対人関係性尺度の下位尺度を目的変数として分析を行った。

MEISの下位尺度において、「対自的同一性」と父親—息子関係の決定係数が $R^2 = .11$ ($F(5, 80) = 2.00, p = .087$)であり、有意傾向にあった (Table 8)。親子関係尺度の定数では、「父子ポジティブ」との関係が有意であった ($p < .05$)。これは同性の父親を理想とし影響を受けるほど、自己意識の明確さが低いことを表している。つまり現時点では理想との間で葛藤し、自己を確立するまでの過渡期にあることが考えられる。

次に対人関係性尺度の下位尺度において、「閉鎖性・防衛性」と母親—娘関係の決定係数が $R^2 = .16$ ($F(5, 85) = 3.18, p = .01$)となり、有意であった (Table 9)。親子関係尺度の定数では、「母子認知」との関係が有意であった ($p < .05$)。また、「閉鎖性・防衛性」と父親—娘関係においても R^2

=.12 ($F(5, 81) = 2.25, p = .057$) となり、有意傾向にあった (Table 10)。親子関係尺度の定数では、「父子ポジティブ」との関係が有意であることが明らかになった ($p < .05$)。これらは親から精神的に独立の状態にあり関係が良好であるほど、傷つくことを恐れ対人関係が閉鎖的で防衛的であることを表す結果となった。つまり両親との関係の安定によって居心地のよい場所を確保したことになり、両親以外の他者との関係には深く踏みこみにくくなっていることが示唆される。

Table 8 父-男子関係と「対自的同一性」との重回帰分析

	標準化係数(ベータ)	有意確率
(定数)		0.00
父子絆	0.25	0.08
父子対立	0.14	0.22
父子ポジ	-0.34	0.03
父子認知	-0.06	0.58
父子服従	-0.06	0.60

従属変数: 対自的

Table 9 母-女子関係と「閉鎖性・防衛性」との重回帰分析

	標準化係数(ベータ)	有意確率
(定数)		0.56
母子絆	0.12	0.29
母子対立	-0.11	0.33
母子ポジ	0.15	0.20
母子認知	0.25	0.01
母子服従	-0.03	0.79

従属変数: 閉鎖性

Table 10 父-女子関係と「閉鎖性・防衛性」との重回帰分析

	標準化係数(ベータ)	有意確率
(定数)		0.38
父子絆	0.08	0.48
父子対立	0.07	0.53
父子ポジ	0.26	0.05
父子認知	0.17	0.11
父子服従	-0.07	0.52

従属変数: 閉鎖性

Table 11 父-女子関係と「自己優先」との重回帰分析

	標準化係数(ベータ)	有意確率
(定数)		0.00
父子絆	0.07	0.55
父子対立	-0.29	0.01
父子ポジ	-0.05	0.71
父子認知	0.12	0.28
父子服従	0.13	0.25

従属変数: 自己優先

多次元自我同一性尺度と対人関係性尺度の相関

男性女性それぞれにアイデンティティと対人関係の関連性について検討するため、各下位尺度の平均得点を計算し2変量の相関分析を行った (Table 12, Table 13)。

まず男性の MEIS と対人関係性尺度の相関分析の結果、「閉鎖性・防衛性」と MEIS の各尺度全てに負の相関、「ありのままの自己」と MEIS の各尺度全てにも正の相関が見られた。「他者依拠」においては「対自的同一性」「対他的同一性」「総得点」との間で負の相関が見られた。「他者受容」においては「総得点」「対他的同一性」で正の相関が見られ、「自己優先」は「自己斉一性・連続性」でのみ負の相関が見られた。

次に女性の MEIS と対人関係性尺度の相関分析の結果、「閉鎖性・防衛性」と「対自的同一性」以外の MEIS の各尺度全ての間で有意な負の相関が見られた。また「ありのままの自己」において「対自的同一性」「対他的同一性」「総得点」との間で正の相関が見られた。「他者依拠」においては「自己斉一性・連続性」「対他的同一性」「総得点」との間で負の相関が見られた。「自己優先」は「心

理社会的同一性」でのみ負の相関が見られた。

これらの相関について検討する。「閉鎖性・防衛性」と MEIS の負の相関は、対人場面で傷つくことを恐れ閉鎖的であることと、アイデンティティ不確立が関連していることを示している。この結果は金子 (1995) の、他者と距離をおく傾向が強い青年ほど、アイデンティティ拡散の感覚が強いという結果とも一致する。「ありのままの自己」と MEIS の正の相関は、欠点を含めたありのままの自己を生きる姿勢を持つことと、アイデンティティ確立が関連していることを表している。「ありのままの自己」の項目は自己意識の明確さを示す「対自的同一性」に共通する内容もあり、関連性は妥当であると考えられる。「他者依拠」と MEIS の負の相関は、他者を気にする傾向にあることと、アイデンティティ不確立が関連していることを表している。これは、他者から見た自己と本来の自己との一致を指す「対他的同一性」、「対自的同一性」との間に負の相関があることから、妥当であると考えられる。

次に「他者依拠」と「他者受容」を男女別に検討する。女性の結果では、「自己」と「他者」との関係を表す「他者依拠」と「連続性」に負の相関が見られた。これは Gilligan (1986) が提唱した、女性は他者との関係性を重視しその中で自己形成することと合致すると考えられる。つまり今までの対人関係が現在の自己斉一性や連続性を形作することを示している。また男性の結果にある「他者受容」と MEIS の正の相関は、他者を受け入れる傾向にあることと、アイデンティティ確立が関連していることを表している。「対他的」項目は他者から見た自己の一致を表すため、正の相関は妥当である。白鳥・清水 (2001) はアイデンティティが確立している場合ほど、友人に対し依存的行動や依存欲求の表出が少なく、確立していないほど友人を信頼できず安定した関係が結べていないと分析している。このことから他者関係とアイデンティティには関連があることが考えられる。

次に「自己優先」について男女ごとに考察した。男性における「自己優先」と「自己斉一性・連続性」との負の相関について、高井 (1999) の自己主張を優先してしまう人は、自己を受容できていない傾向にあるという指摘と一致する。女性における「自己優先」と「心理社会的同一性」との負の相関について、高井 (1999) はボランティアや社会的活動を行っている人の「自己優先」は行っていない群よりも有意に低いことを示した。また、行っていない群はまず自分のことを相手に分かってほしいという気持ちが強く、自己主張を優先しやすいと示している。このことは本研究の結果とも合致するものである。

Table 12 男性のMEISと対人関係性尺度の相関

	閉鎖性・防衛性	ありのままの自己	他者依拠	他者受容	自己優先
対自的同一性	-0.49**	0.46**	-0.27*	0.18	-0.18
自己斉一性・連続性	-0.61**	0.24*	-0.12	0.20	-0.24*
心理社会的同一性	-0.57**	0.33**	-0.15	0.07	-0.13
対他的同一性	-0.64**	0.39**	-0.21*	0.36**	-0.20
総得点	-0.72**	0.45**	-0.22*	0.27*	-0.24

** $p < .01$, * $p < .05$

Table 13 女性のMEISと対人関係性尺度の相関

	閉鎖性・防衛性	ありのままの自己	他者依拠	他者受容	自己優先
対自的同一性	-0.16	0.22*	-0.16	0.04	-0.21
自己斉一性・連続性	-0.28**	0.19	-0.21*	-0.18	0.04
心理社会的同一性	-0.33**	0.20	-0.15	0.14	-0.21*
対他的同一性	-0.59**	0.37**	-0.27*	0.06	-0.15
総得点	-0.46**	0.34**	-0.28**	-0.01	-0.17

** $p < .01$, * $p < .05$

多次元自我同一性尺度と対人関係性尺度の関連性

アイデンティティと対人関係の関連性を検討するため、対人関係性尺度の5因子を説明変数、MEISの全体指数を目的変数にして重回帰分析を行った(Table 14, Table 15)。その結果男性の決定係数は $R^2 = .53$ ($F(5, 83) = 18.56$)、女性は $R^2 = .25$ ($F(5, 85) = 5.53$) とともに有意であった($p = .00$)。対人関係性尺度の定数は、男女ともに「閉鎖性・防衛性」との関係が有意であった ($p < .01$)。つまり対人場面で傷つくことを恐れ閉鎖的であるほどアイデンティティが不確立であり、開放的であるほど、アイデンティティが確立されていると推察される。

Table 14 男性のMEISと対人関係性尺度の重回帰分析

	標準化係数(β)	有意確率
(定数)		0
閉鎖性・防衛性	-0.65	0.00
ありのままの自己	0.12	0.24
他者依拠	0.05	0.60
他者受容	0.05	0.58
自己優先	-0.05	0.63

従属変数: MEIS総得点

Table 15 女性のMEISと対人関係性尺度の重回帰分析

	標準化係数(β)	有意確率
(定数)		0
閉鎖性・防衛性	-0.37	0.00
ありのままの自己	0.11	0.42
他者依拠	-0.09	0.47
他者受容	-0.09	0.40
自己優先	-0.10	0.39

従属変数: MEIS総得点

総合考察

本研究では、大学生を対象に両親との関係・アイデンティティ・他者関係の3尺度の関連を調査し、その性差を検討することを目的とした。その結果、親への態度がアイデンティティと他者との関係に影響及ぼしていることは明確に見出せず、他者関係がアイデンティティに影響を及ぼしていることが見出された。

まず親子関係と、アイデンティティと対人態度との関連性がみられなかった結果を検討する。この理由として以下の2点が挙げられる。まず尺度の妥当性の問題である。つまり親への感謝や思いやりを問う項目に、親への甘えや依存が含まれていたことが推測される。そのため、親からの独立や客観的な態度とアイデンティティ確立の関係を見ることはできなかつたと考えられる。竹澤・小玉(2004)にもあるように、依存欲求が高い場合自己を客観的に捉えることが困難となり、アイデンティティを確立しにくくなることが推測される。

第2に対象者の影響である。対象者のうち2/3以上が一人暮らしであったため、日頃両親と接す

ることが少なく、そのため直接的な影響が見られなかったことが考えられる。親と同居の場合、大学生であっても親との関係についてイメージしやすく、現状を反映した結果が得られやすい。しかし一人暮らしの場合、親との物理的距離が心理的距離を問う質問にも影響を与えていたり、大学生の理想の親子像が反映していることも推測される。また直接的な両親との関わりが少ないことは、対象者が両親よりむしろ他者の影響を受けやすい状況でもある。このような状況は自己を客観的に見つめる機会を与えてくれるため、他者関係がより重要になると考えられる。金子（1995）の「他の人との違い意識」が強い青年ほど「自分への確信」が高いという結果からも、アイデンティティを形成する上で他者関係が重要であることが示されている。

次に性差について検討する。各因子得点を対象として性別を要因とした t 検定を行った結果、男性は女性より対人場面において他者よりも自己を優先する傾向にあることが示された。一方女性は、より母親からポジティブな影響を受けていると感じ、また対人場面ではより他者に対して受容的な態度をとる傾向にあることが示された。

男性における3尺度の分析結果から、男性のアイデンティティには父親への同一視と母親との対立が関連していると考えられる。森下（1977）でも言及されているように、父親を理想像とし依存的同一視を行うことで、向かうべき目標となる自己を模索している過程であるため、「対自的同一性」との負の相関が示されたと考えられる。そして母親との対立により、これまで母親から与えられた価値観や観念を一度捨て、自分自身の行動や思考から得た経験によって価値観を再構築しようとして揺れ動いている。そのため、「心理社会的同一性」との負の相関が示されたと考えられる。

一方女性における3尺度の分析結果からは、アイデンティティに関して父親との関連が無く、全体的に母親との関連が強いことが挙げられる。これは、母親に対して男性よりも依存欲求が高かったことを示した井上（1999）の結果とも合致する。そして男性同様、同性の親への親和性が高く、母親に対する依存欲求が強いことが示唆される。ただ「母子絆」を表す項目は小沢・湯沢（1989）の「親への甘えの因子」と類似していたことから、今回測定された「絆」は、精神的なつながりよりはむしろ、甘えのつながりであると考えられる。この依存関係が青年女子のアイデンティティ確立を遅らせる要因の一つであることも考えられる。ただ岡本・上地（1999）にあるように、女性は母親との心理的に密着した関係を維持しつつ成長の過程を歩むことも考えられることから、このような母子関係も発達過程なのかもしれない。

以上、本研究によりアイデンティティは親子関係よりもむしろ対人関係に影響を受けることが明らかになった。ただ、いくつかの問題点も残されている。本研究は大学生への質問紙のみの調査であり、青年期の自我発達や親子関係の変化の過程を知るには面接調査を行う必要がある。また親子関係における「甘え」や「依存」に関しては、「情愛的絆」と区別して示すため新たな尺度作成を行うことも必要である。尺度作成を行うことで、「自立」と「依存」だけでは表しきれない青年期の新たな親子関係を示すことが可能となるだろう。

引用文献

- Gilligan, C. (1982). *In a Different Voice: Psychological Theory and Women's Development*. Cambridge, MA: Harvard University Press. 岩男寿美子 (監訳) (1986). もうひとつの声—男女の道德観のちがいと女性のアイデンティティ. 川島書店.
- 金子俊子 (1989). 青年期女子の親子・友人関係における心理的距離の研究 青年心理学研究, 3, 10-19.
- 金子俊子 (1995). 青年期における他者との関係のしかたと自我同一性 発達心理学研究, 6, 41-47.
- 小高 恵 (1998). 青年期後期における青年の親への態度・行動についての因子分析的研究 教育心理学研究, 46, 333-342.
- 井上忠典 (1999). 青年期における両親との関係の発達的变化: 依存欲求・独立欲求・葛藤を指標として 日本教育心理学会総会発表論文集, 41, 678.
- 森下正康 (1977). 親に対する子どもの態度スケールの作成とその分析—性格形成における同一視理論の検討のために 和歌山大学教育学部紀要 教育科学, 26, 77-86.
- 西平直喜・久世敏雄 (1988). 青年心理学ハンドブック 福村出版
- 落合良行・佐藤有耕 (1996). 親子関係の変化からみた心理的離乳への過程の分析 教育心理学研究, 44, 11-22.
- 岡本清孝・上地安昭 (1999). 第二の個体化の過程からみた親子関係および友人関係 教育心理学研究, 47, 248-258.
- 小沢一仁・湯沢理恵子 (1989). 青年期の心理的離乳と同一性—心理的離乳尺度の作成と同一性地位との関連— 帝京学園短期大学研究紀要, 3, 63-743.
- 白石尚大・岡本祐子 (2005). 大学生の意欲低下傾向とアイデンティティ発達, 家族機能の関連性 青年心理学研究, 17, 1-13.
- 白鳥優子・清水紀子 (2001). 青年期女子のアイデンティティ形成と友人関係 日本教育心理学会総会発表論文集, 43, 518
- 高橋由利子 (2001). 青年期のアイデンティティの発達と親子関係について 日本教育心理学会総会発表論文集, 43, 220.
- 高井範子 (1999). 対人関係性の視点による生き方態度の発達的研究 教育心理学研究, 47, 317-327.
- 竹澤みどり・小玉正博 (2004). 青年期後期における依存性の適応的観点からの検討 教育心理学研究, 52, 310-319.
- 谷冬彦 (2001). 青年期における同一性の感覚の構造—多次元自我同一性尺度(MEIS)の作成— 教育心理学研究, 49, 265-273.
- 山岸明子 (2000). 女子青年によって再構成された幼少期から現在にかけての母親との関係 青年心理学研究, 12, 31-46.